

# パースペクティブ・テイキング行為に関する研究

## ——独自性欲求との関連から——

昭和女子大学人間社会学部 平田万理子

Real actions in perspective-taking: The relationship to need for uniqueness.

Mariko Hirata (Faculty of Human and Social Science, Showa Women's University)

The purposes of this study were to identify and classify the behaviors involved in perspective-taking, and to verify the effect of individual differences on perspective-taking. Ninety-seven university students completed three scales, frequency of real actions in perspective-taking, need for uniqueness scale, and perspective-taking scale. The results showed that real actions in perspective-taking can be classified into 5 factors: "imaging and remembering", "involvement and understanding", "entertainment", "exploration and acting out", and "self-regulation". Further, the influences of individual differences were different in relation to each of these factors. Besides, the relevance of uniqueness theory to this result is discussed.

**Key words :** uniqueness, perspective-taking, self-control, a difference-based sense of self

私たちは、日常生活の様々な場面で自己と他者が異なるという感覚（自己差異性：a difference-based sense of self）を知覚する。自己差異性を知覚する状況には、“一緒に見た映画の感想が異なる”や“自分の好みを理解してもらえない”などといった、感性や価値観、趣味・嗜好の違いに起因する“内面的な差異性知覚状況”と、“自分だけが話題についていけない”や“（第三者から）自分だけが特別扱いされる”などといった、主に能力差や処遇差に起因する“外面的な差異性知覚状況”がある（平田，1998）。対人場面におけるこうした差異は、その状況ごとに差異への意味づけが異なるため、私たちは自己差異性を知覚する都度、“この差異は他者にどのように受け止められるか？”，“この差異を自分は受容できるか？”などの判断を求められる。そして、他者からの否定的な評価を逃れるため、あるいは自ら受容するため、必要に応じてその差異を調整するのである。

そもそも人には、“自分は他者とは異なる独自な存在でありたい”という“独自性欲求（need for uniqueness）”がある。Snyder & Fromkin（1980）は、この欲求の定義を含む、独自性理論（uniqueness theory）を提唱し、その中で、独自性欲求とは基本的欲求の一つであり、その強さには個人差があるものの、人は誰でもこの独自性欲求を有しているとした。独自の存在でありたいにもかかわらず自他が弁別されない（自他が極度に類似する）ことは、欲求充足の妨げとなり、その結果、ネガティブな感情が生じられる。だが、他の多くの基本的欲求とは異なり、この独自性欲求は満たされれば満たされるほど、つまり自己が他者と異なれば異なるほど満足感が増すというものではない。独自性理論では、自他が中程度に異なる（差異と類似がバランスよく存在する）時、人は最もポジティブな感情を抱くとされている。概して、他者との極端な差異は“異常”や“逸脱”を

意味し、社会的生活において大きな支障をもたらす。また、人は、独自性欲求を持つと同時に、所属欲求も持つ (e.g., Baumeister & Leary, 1995; Maslow, 1954) ため、他者からの拒否 (所属する場の喪失) を促す恐れのある“異常”や“逸脱”を避けなくてはならない。そのため、他者から受容されつつ (所属する場を持ちつつ)、自己の独自性を維持するために、自他が中程度に異なる状況を求めるのである。

この“中程度の差異性”を保つためには、その状況において、差異が“どのように受け止められているか (差異の評価)”, “どの程度なのか (差異の程度)”, “妥当な程度なのか (差異の状況妥当性)” や, “相手から見ても異なっているか (差異の合意的妥当性)” を検証し続け、差異に対する自己コントロール (self-control) を行わなければならない。そしてそれは、“他者の視点”を意識することによって実現できると考えられる。つまり、他者の視点を意識し、差異が中程度に留まるよう、状況に応じて差異を調整するのである。実際に、自己差異性の知覚に影響を及ぼす個人差要因を調べた平田 (1998) から、相手に合わせて自分の行動を変えるという“他者志向性”が強いほど自己差異性の知覚が強まることが明らかになっており、自己差異性の知覚において他者の視点を意識することの重要性が示唆されている。そして、この“他者の視点を意識する”ということは、パースペクティブ・テイキング (perspective-taking: 以下PTと表記) を行うことに他ならない。

PTとは、“優勢で自動的、自己中心的な視点を離れ、それとは別の視点から出来事、他者、自己を眺め理解する認識作用”のことであり (中江・古賀・平田・山口・坂井・押見, 2000)、従来の共感研究において共感が自他の分化によって実現されるために、不可欠なものであると考えられている (Davis, 1983)。

では実際に、差異が生じている他者 (相手) の視点に立つと自己差異性の知覚はどのように変化するのだろうか。自他の差異性とPTの関連性について言及した研究に、Davis, Conklin, Smith,

& Luce (1996) がある。この研究では、他者の視点を取りながらその人物の行動を見ることを求められた実験参加者は、他者を観察することを求められた者よりも、その人物の特性を挙げるよう指示された時、前もって自らの特性として挙げた項目をその人物に対してもあてはまると考える傾向が強まる、すなわち、自他の融合が生じることが示された。また、その融合の度合いは、PTの行為形態によっても若干異なり、概して最も差異が消失するのは、“自分と他者を置き換える”よう指示された想像自己群であり、同じようにPTを行うが、“他者の視点そのものを想像する”よう指示された想像他者群では、自他の融合の度合いは比較的小さいことが明らかとなった (平田, 2002)。

なぜこのようなPTの行為形態による違いが示されたのか? そもそも、“相手の視点に立つ”ということは、具体的にはいったいどのような認知的作業をしていることなのであろうか? これらの疑問を解くために、平田 (2007) は、人が、どのような時にどのようにしてPTを行い、どのような感情を抱いているのか、またその際に自他の差異はどのように認識されているのかについて探索的・質的な調査を行った。その結果、人は“他者がネガティブな状況 (悩んでいる、悲しんでいるなど)”でPTを行っており、その行為の具体的な内容は、大別すると、考える・想像する・置き換える・想起するなどの“想像・想起”、相手への配慮・自らの意見や感情の抑制などの“自己制御”、見る・聞く・理解するなどの“他者への関与”であること、また、PTを行うことによって、単に他者への理解が促進されるばかりではなく、ネガティブな他者に自己を重ねようとする結果、自らもネガティブな感情状態に陥りやすくなることが示された。加えて、PTにおける自他の表象は重なりやすいことが示された。さらに、ここで得られたPTの具体的行為からPT行為尺度を作成し、その因子構造と自他の融合度との関係性を調べた平田 (2008) によると、PT行為の中でも自らの意見や感情を抑制する“自己制御”や、自ら

の思考・感情・行動を考える“思索（想起）”においては、自他の融合度が比較的少ないことが明らかとなった。したがって、Davis et al. (1996)の研究では、他者の視点を取ることを求められた調査対象者、とりわけ想像自己群が実際に行っていた認知的作業は、自他を重ねることそのものであり、自他の融合が生じたのは当然の結果であり、だからこそ、認知的にはまだ自他の弁別が可能な想像他者群においては、融合の度合いが弱まったと考えられるのである。

この考えの妥当性を示すためには、PT行為のありようについて、その構造や特徴の違いなどに関する更なる調査が必要であろう。そこで、本研究ではそれぞれのPT行為に影響を及ぼす個人差特性に焦点をあて、どのような特性を有していればどのようなPT行為が促進されるのかについて検証する。取り上げる個人差特性として、独自性欲求の強さを測定する独自性欲求尺度 (Snyder & Fromkin, 1980) と、特性としてのPTの強さを測定するPT尺度 (中江他, 2000) を使用する。独自性欲求尺度を取り上げた理由は、対人場面における自他の差異に対する初期態度の違いを考慮するためである。人が独自性を求める背景には、その根底として差異に対する肯定的な感情があると考えられる。差異をよいものであるとみなす傾向が強いからこそ、独自であることを求めるのである。加えて、前述したように、独自性欲求が中程度の差異性によって最も充足されるものであるならば、独自性欲求が強い人というのは、“差異に対して肯定的な感情が強く、中程度の差異性を希求する人”という人物像を描くことができる。中程度の差異性を維持するためには、状況ごとに行われる差異に対する自己コントロールが不可欠である。したがって、独自性欲求が強い場合、差異性に対する自己コントロールにより、自己理解や自己制御と関連のあるPT行為は促進されるが、差異性の自己コントロールとは直接関係のない他者への配慮や他者理解と関連のあるPT行為には影響を及ぼさないと考えられる (仮説1)。また、PT尺度を取り上げた理由は、相手の視点を取る

ことに対する特性としての傾向差や能力差が、具体的なPT行為に少なからず影響を及ぼすと考えたからである。中江他 (2000) によると、特性としてのPT尺度には、自己の視点とそれとは異なる他者の視点を等しく考慮して物事を捉えようとする認知傾向を示す“視点共存 (symbiosis)”と、自己の視点の中に他者の視点を取り込んで他者を理解しようとする認知傾向を示す“視点移入 (import)”があり、この二つは内容的にも、他の自己特性 (自己意識, セルフ・モニタリング) との関連性においても、違いのあることが明らかとなっている。こうした違いは、具体的なPT行為にも異なる影響をもたらすと考えられる。視点共存が強い場合、自己理解や自己制御といった自他を弁別することによって成立するPT行為は促進されるが、視点移入が強い場合は他者への配慮や他者理解といった、いくらか自他を融合させる必要のあるPT行為が促進されると考えられる (仮説2)。以上のことより、本研究では、人がPTを行う際に具体的に行っているPT行為のありようについて明らかにするために、具体的なPT行為が列挙された尺度についてこの構造を明らかにすると共に、これらの仮説について検証を行うことを目的とする。

## 方法

### 調査対象者

都内私立4年制大学 (看護系, 心理系) に通う大学生97名 (男性15名, 女性79名, 不明3名) を対象とした。平均年齢は18.71歳 ( $SD=1.41$ ) であった。なお、回答の一部に欠損があり、それぞれの分析によって有効回答数は異なる。

### 手続き

心理学の授業の一環として、後述する質問紙を配布した。質問紙の1ページ目に記された調査内容 (教示) を各自で読み、応諾した学生のみを対象として回答を求めた。

### 質問紙の構成

**PT行為尺度** 平田 (2007) によって収集され

たPT時の具体的行為（25動詞）と、それら動詞への係り受けを考慮し、相手の立場に立つ際に具体的にを行っていることとして、“私だったら…と想像する”、“相手の話を聞く”、“相手の立場と自分の立場を置き換える”、“相手の喜ぶことをする”、“自分の意見を抑える”など36項目から成るPT行為尺度を作成し、1（全く実践していない、全く試みていない）から5（とても実践している、とても試みている）の5件法で回答を求めた。

**独自性欲求尺度** Snyder & Fromkin（1980）により考案された独自性欲求尺度（need for uniqueness scale）を中村（2000）が翻訳した日本語版を用い、1（全くあてはまらない）から5（非常にあてはまる）の5件法で回答を求めた。

**パースペクティブ・テイキング尺度（以下、PT尺度と表記）** 中江他（2000）により作成されたPT尺度を用い、1（全くあてはまらない）から5（非常にあてはまる）の5件法で回答を求めた。

**Table 1**  
**PT行為尺度の因子分析結果（主因子法・promax回転）**

項目番号	項目内容	因子負荷量					共通性
		I	II	III	IV	V	
23	相手の立場と自分の立場を置き換える	.869	-.075	.122	-.207	-.116	.713
29	自分の経験を思い出す	.866	-.467	-.007	.193	-.118	.564
34	私だったら…と想像する	.846	-.134	.220	-.103	-.008	.746
22	相手の状況を想像する	.784	.114	-.083	-.070	.045	.651
36	相手の立場を想像する	.781	.125	-.145	.041	.148	.721
8	相手と似た状況を思い出す	.764	-.106	.015	-.080	-.123	.480
24	自分の行動を考える	.698	-.092	-.117	.160	.038	.459
32	自分の気持ちを考える	.676	.041	.002	.157	.061	.604
16	私だったら…と置き換える	.658	.061	.310	-.149	-.001	.717
31	相手の状況を見る	.607	.164	-.004	.195	.126	.681
25	相手の考えていることを分析する	.539	.330	-.318	-.110	-.091	.438
20	相手の気持ちを想像する	.533	.307	-.015	.093	.027	.631
17	相手の立場を考える	.512	.147	.077	.210	.167	.606
1	私だったら…と考える	.500	.114	.242	-.159	-.090	.470
30	相手の考えていることを理解する	.461	.327	-.038	.011	.055	.494
3	相手の気持ちを理解する	-.131	.790	.013	.034	-.095	.542
11	相手の気持ちを考える	-.082	.786	.103	-.010	-.031	.601
4	相手の行動を考える	.020	.651	.100	-.020	-.147	.500
7	相手の表情を見る	-.192	.590	.006	.128	-.030	.305
14	相手の状況を考える	.202	.554	.253	-.170	.030	.626
13	相手の考えていることを聞く	.102	.545	-.041	.072	-.168	.409
21	相手の考えていることを考える	.350	.521	-.102	.060	.142	.632
6	相手の嫌がることを考える	.033	.488	-.034	-.40	.015	.216
15	自分だったらうれしいを思うことをする	-.176	.150	.701	.124	.001	.508
33	相手の喜ぶことを考える	.152	.005	.643	.161	.020	.586
10	相手の喜ぶことをする	.115	-.087	.544	.242	.058	.411
28	話す	-.033	-.118	.262	.801	-.083	.662
26	質問する	.295	.065	-.085	.546	-.279	.583
18	相手の目を見る	-.172	.369	.171	.506	.091	.491
9	自分の意見を抑える	-.059	-.094	-.027	-.101	.828	.717
12	自分の感情を抑える	.056	.156	.074	-.090	.786	.639
回転後の負荷量平方和		11.26	2.13	1.60	1.27	1.15	
因子間相関							
		I	—	.634***	.439***	-.034	
		II		—	.456***	-.105	
		III			—	-.038	
		IV				—	-.238*

\*\*\*  $p < .001$

\*  $p < .05$

$n=90$

めた。

## 結果

### PT行為尺度の因子分析

相手の立場に立つ際に、人が具体的にしている行動のありようを明らかにするために、PT行為尺度36項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットから5因子を指定し再度分析を行い、因子負荷量が.35未満、および.35以上が複数因子に表れた計5項目を削除した上で、残った項目についてもう一度分析を行い、以下の5因子を抽出した（Table 1）。第1因子として負荷量の高かった項目は、“相手の立場と自分の立場を置き換える”，“自分の経験を思い出す”，“私だったら…と想像する”，“相手の状況を想像する”，“相手の立場を想像する”，“相手と似た状況を思い出す”などで、自他を入れ替えるなどしてPTを行う相手を想像したり、自分の経験の中から手がかりとなるようなものを想起したりする行為であり、“想像・想起因子”と命名した。第2因子として負荷量の高かった項目は、“相手の気持ちを理解する”，“相手の気持ちを考える”，“相手の行動を考える”，“相手の表情を見る”，“相手の状況を考える”，“相手の考えていることを聞く”などで、PTを行う相手の表情を見たり、相手の気持ちや考えていることを自ら考えたり聞いたりするなどして、相手のことを理解しようと試みる行為であり、“関与・理解因子”と命名した。第3因子として負荷量の高かった項目は、“自分だったらうれしいと思うことをする”，“相手の喜ぶことを考える”，“相手の喜ぶことをする”で、PTを行う相手を喜ばせようと試みる行為であり、“もてなし因子”と命名した。第4因子として負荷量の高かった項目は、“話す”，“質問する”，“相手の目を見る”で、PTを行う相手に直接働きかけることで相手の状

況を知ろうとする行為であり、“探究・実践因子”と命名した。第5因子として負荷量の高かった項目は、“自分の意見を抑える”，“自分の感情を抑える”で、PTを行うために自らを制御しようとする行為であり、“自己制御因子”と命名した。各因子の $\alpha$ 係数は、第1因子.937、第2因子.839、第3因子.732、第4因子.720、第5因子.832であった（なお、尺度全体の $\alpha$ 係数は.929であった）。また、各因子間の相関は、Table 1を参照のこと。

### PT尺度の因子分析<sup>1</sup>

PT尺度の構造について明らかにするために、PT尺度12項目について、主因子法・プロマックス回転による因子分析を行った。スクリープロットおよび中江他（2000）の因子解釈を参考に2因子を指定し再度分析を行い、因子負荷量が.35未満、および.35以上が複数因子に表れた4項目を削除した上で、残った項目についてもう一度分析を行い、次の2因子を抽出した（Table 2）。第1因子として負荷量の高かった項目は、“どの問題にも異なった立場があるはずなので、その両面を考えるよう心がけている”，“人を批判する前に、自分自身が同じ立場だったらどうだろうかと考えてみる”，“誰かにいらいらさせられたときには、その人の身になって”ちょっと考えてみるようにしている”などで、中江他（2000）の解釈による“視点共存（symbiosis）因子”に値すると考えられたため、同様に命名した。第2因子として負荷量の高かった項目は、““人からバカにされるようなことをする人”の考え方は、よくわからない”，“初対面の人が不可解な行動をしたときには、変な人”で片付けてしまう”であり、中江他（2000）の解釈による“視点移入（import）因子”に値すると考えられたため、同様に命名した。各因子の $\alpha$ 係数は、第1因子.773、第2因子.451であった（なお、尺度全体の $\alpha$ 係数は.635であった）。また、因子間の相関は $r=.039$ （*n.s.*）であった。

<sup>1</sup> PT尺度の因子分析結果については、第2因子の項目数の過少や $\alpha$ 係数の低さという問題もあるが、中江他（2000）より若干項目数は減少しているもののその内容は類似しており、本研究における $\alpha$ 係数も中江他の $\alpha$ 係数（ $\alpha=.473$ ）とほぼ同じ水準を満たしていることと、本研究の主たる目的のひとつであるPT行為尺度とPT尺度における視点共存・視点移入との関連性の検討を考慮し、本因子分析結果を採用することとした。



**Table 2**  
**PT尺度の因子分析結果（主因子法・promax回転）**

項目 番号	項目内容	因子負荷量		共通性
		I	II	
5	どの問題にも異なった立場があるはずなので、その両面を考えるよう心がけている	.878	.095	.780
7	人を批判する前に、自分自身が同じ立場だったらどうだろうかと想像してみようとしている	.782	.022	.612
6	誰かにいらいらさせられたときには、“その人の身になって” ちょっと考えてみようとしている	.740	-.089	.555
3	友人が物事をどのようにとらえているか考えることで、その友人のことをもっとよく理解しようと心がけている	.515	-.231	.317
4R	自分が正しいと確信があるのなら、多くの時間を割いてまで他人の意見を聞くようなことはしない	.392	.225	.206
11	相談を持ちかけられたときには、自分の助言が一人よがりではないかを考えるようになっている	.377	.039	.144
1R	“人からバカにされるようなことをする人” の考え方は、よくわからない	-.116	.613	.388
10R	初対面の人が不可解な行動をしたときには、“変な人” で片づけてしまう	.130	.544	.313
回転後の負荷量平方和		2.52	0.79	

$n=95$

## PT行為への影響<sup>2</sup>

相手の立場に立つ際に人が具体的にしている行為に対して、独自性欲求の強さやPTのありようがどのように影響を及ぼしているのかを調べるために、PT行為尺度における各5因子に負荷量の高かった項目の合計得点を算出し、得られた下位尺度得点をそれぞれ従属変数、独自性欲求尺度32項目の合計得点、およびPT尺度における2因子に負荷量の高かった項目の合計得点を算出し、得られた下位尺度得点を独立変数にした分散分析を行った。したがって、分析のモデルは、PT行為尺度における5因子の下位尺度得点をそれぞれ従属変数とした、2（独自性欲求の高・低）×2（PT尺度における第1因子“視点共存”の高・低）×2（PT尺度における第2因子“視点移入”の高・低）の3元配置分散分析である。

分析の結果、PT行為尺度の第1因子“想像・想起”において、PT尺度の第1因子“視点共存”の主効果がみとめられ（ $F(1, 77)=31.53, p<.001$ ）、視点共存の低群（ $M=53.68, N=37$ ）は高群（ $M=62.63, N=48$ ）よりも想像・想起を行わないことが示された（Table 3-1）。

PT行為尺度の第2因子“関与・理解”において、視点共存の主効果がみとめられ（ $F(1, 79)=7.84, p<.01$ ）、視点共存の低群（ $M=31.38, N=39$ ）は高群（ $M=33.65, N=48$ ）よりも関与・理解をしないことが示された。さらに、独自性欲求×視点共存の交互作用もみとめられた（ $F(1, 79)=4.74, p<.05$ ；Figure 1）。下位検定の結果、独自性欲求の高群において、視点共存の高低による有意差があり（ $F(1, 79)=11.07, p<.01$ ）、視点共存の低群（ $M=30.29, N=17$ ）は高群（ $M=34.62, N=21$ ）よりも関与・理解をしないことが示された（Table 3-2）。

PT行為尺度の第3因子“もてなし”において、視点共存の主効果がみとめられ（ $F(1, 80)=4.53, p<.05$ ）、視点共存の低群（ $M=11.80, N=40$ ）は高群（ $M=12.52, N=48$ ）に比べてもてなしをしないことが示された（Table 3-3）。

PT行為尺度の第4因子“探究・実践”において視点共存の主効果がみとめられ（ $F(1, 78)=4.55, p<.05$ ）、視点共存の低群（ $M=11.47, N=38$ ）は高群（ $M=12.35, N=48$ ）よりも探究・実践を行わないことが示された（Table 3-4）。

<sup>2</sup> 独自性欲求尺度については、先行研究において一貫した因子構造を示しておらず（e.g., 中村, 2000；岡本, 1985；Snyder & Fromkin, 1980）、本研究においても独自性欲求の全般的な高低のみに着目しその内部構造については考慮しないため、ここでは独自性欲求尺度32項目の合計得点を算出し、その後の分析に用いることとした。

Table 3 - 1

PT行為尺度第1因子“想像・想起”における各群の  
平均値とSD（主効果のみとめられたものについて）

		M (SD)	N
独自性欲求	低群	59.12 (7.20)	49
	高群	58.19 (10.73)	36
PT尺度第1因子	低群	53.68 (8.12)	37
“視点共存”	高群	62.63 (7.27)	48
PT尺度第2因子	低群	58.26 (7.90)	46
“視点移入”	高群	59.28 (9.87)	39

\*\*\*  $p < .001$

Table 3 - 2

PT行為尺度第2因子“関与・理解”における各群  
の平均値（主効果のみとめられたものについて）

		M (SD)	N
独自性欲求	低群	32.59 (4.00)	49
	高群	32.68 (4.38)	38
PT尺度第1因子	低群	31.38 (4.06)	39
“視点共存”	高群	33.65 (3.95)	48
PT尺度第2因子	低群	32.38 (4.04)	45
“視点移入”	高群	32.90 (4.27)	42

\*\*  $p < .01$

注：独自性欲求尺度×PT尺度第1因子“視点共存”の要因間に  
有意な交互作用あり（Figure 1 参照）

Table 3 - 3

PT行為尺度第3因子“もてなし”における各群  
の平均値（主効果のみとめられたものについて）

		M (SD)	N
独自性欲求	低群	12.35 (1.64)	49
	高群	12.00 (1.75)	39
PT尺度第1因子	低群	11.80 (1.49)	40
“視点共存”	高群	12.52 (1.79)	48
PT尺度第2因子	低群	12.24 (1.54)	46
“視点移入”	高群	12.14 (1.86)	42

\*  $p < .05$

PT行為尺度の第5因子“自己制御”において  
独自性欲求の主効果がみとめられ $F(1, 80) = 12.22$ ,  
 $p < .01$ ), 独自性欲求の高群 ( $M = 5.87$ ,  $N = 39$ ) は  
低群 ( $M = 7.12$ ,  $N = 49$ ) よりも自己制御を行わな  
いことが示された (Table 3 - 5)。

## 考察

本研究では、PTを行う際、人が具体的に行っ  
ている様々な行為（PT行為）のありようを調べ  
るため、PT行為尺度を作成し、その因子構造に

Table 3 - 4

PT行為尺度第4因子“探究・実践”における各群の  
平均値とSD（主効果のみとめられたものについて）

		M (SD)	N
独自性欲求	低群	11.65 (1.91)	48
	高群	12.37 (2.28)	38
PT尺度第1因子	低群	11.47 (2.22)	38
“視点共存”	高群	12.35 (1.94)	48
PT尺度第2因子	低群	12.04 (2.15)	45
“視点移入”	高群	11.88 (2.06)	41

\*  $p < .05$

Table 3 - 5

PT行為尺度第5因子“自己制御”における各群の  
平均値とSD（主効果のみとめられたものについて）

		M (SD)	N
独自性欲求	低群	7.12 (1.42)	49
	高群	5.87 (1.85)	39
PT尺度第1因子	低群	6.58 (1.66)	40
“視点共存”	高群	6.56 (1.81)	48
PT尺度第2因子	低群	6.67 (1.75)	46
“視点移入”	高群	6.45 (1.73)	42

\*\*  $p < .01$

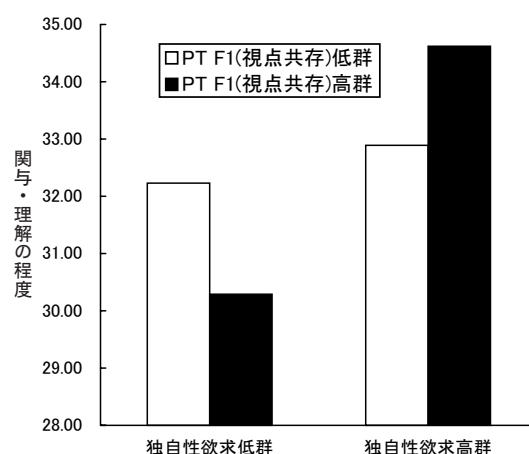


Figure 1. 各群における“関与・理解”の平均値

ついて明らかにすると共に、それら行為の生起に  
影響を及ぼす個人差特性として独自性欲求尺度と  
PT尺度を取り上げ、“独自性欲求が強い場合、差  
異性に対する自己コントロールにより、自己理解  
や自己制御と関連のあるPT行為は促進されるが、  
差異性の自己コントロールとは直接関係のない他

者への配慮や他者理解と関連のあるPT行為には影響を及ぼさないと考えられる（仮説1）”、“視点共存が強い場合、自己理解や自己制御といった自他を弁別することによって成立するPT行為は促進されるが、視点移入が強い場合は他者への配慮や他者理解といった、いくらか自他を融合させる必要のあるPT行為が促進されると考えられる（仮説2）”という二つの仮説を立てて、その検証を行った。

### PT行為尺度の構造とその行為の生起に影響を及ぼす個人差特性

PT行為尺度の因子分析結果から、PTを行う際に人が具体的に行っている行為には、PTを行う相手を想像し、手がかりとなるような自己の経験を想起するという“想像・想起”、表情を見るなどしてPTを行う相手を理解しようと試みる“関与・理解”、PTを行う相手を喜ばせる“もてなし”、質問するなどしてPTを行う相手を理解すべく直接相手と関わる“探究・実践”、PTを行うために自ら行動を制御する“自己制御”のあることが明らかとなり、PT行為の構造面での複雑性が示された。さらに分散分析の結果から、これら五つのPT行為への促進因・抑制因がそれぞれ異なることが明らかとなり、具体的なPT行為における特徴面での多様性が示された。そしてその中には、本研究の仮説として想定していなかった要因（個人差特性）間の間接的な効果（交互作用による影響）もみられた。そこでまず、仮説に直接的な示唆をもたらす結果（個々の要因による主効果がみとめられた結果）について考察を加える。

“想像・想起”においては視点共存というPT特性が促進因となり、視点共存をしやすい人はそうでない人に比べて想像・想起をしやすいことが明らかとなった。視点共存とは自己の視点と他者の視点を併せ持つことであり、この傾向が強い人は自他を弁別できている人だと考えられる。視点をとる他者のことをあれこれ想像したり、自分の経験の中から手がかりとなるような類似点を想起したりするのは、ある程度、自他が弁別されていないとできないのではないかと。根源的に、自己は

他者にはなれない（自己と他者は異なる）ため、人は、他者が今置かれている立場や感じていることをそのまま共有することはできない。だからこそ人は“想像”するのであり、自己の経験の中からできるだけ近いところのものを探そうと（共有できるものを探そうと）類似の手がかりを“想起”するのであろう。したがって、“想像・想起”とは自他が弁別されているからこそ生じる行為であると考えられるのである。このことから、仮説2は支持されたと考えることができよう。また、想像も想起も、基本的には他者を理解するために行うものであり、自己理解や自己制御とは直接関連していないと考えられる。ゆえに、この行為において独自性欲求の影響が見られなかったことは、仮説1を支持する内容でもあったといえよう。

同様に、“関与・理解”や“もてなし”、“探究・実践”においても、視点共存というPT特性が促進因となり、視点共存をしやすい人はそうでない人に比べて視点をとる他者への関与や理解を促し、他者を喜ばせようと試み、他者へ積極的に働きかけることが明らかとなった。また、PT行為において“視点移入”というPT特性は何ら影響を及ぼさなかった。とりわけ、他者への配慮や他者理解を示す“もてなし”や“関与・理解”において視点移入との関連がみられなかったことや、自他の弁別を示す“自己制御”において視点共存との関連が見られなかったことから考えると、仮説2は一部支持されなかったといえよう。今回のPT行為尺度において“自己制御”に分類された項目は、“自分の感情を抑える”、“自分の意見を抑える”であり、“他者を理解するため”、“他者の視点をとるため”というその動機的な部分が欠落していた。そのことが、視点共存によるこの行為の生起に与える影響力の欠如をもたらしたのかもしれない。加えて、“相手の喜ぶことをする”、“相手の喜ぶことを考える”に代表される“もてなし”というPT行為において、“自分だったら…”という視点移入の意識が少なかった可能性も否めない。“もてなし”という行為の中には“こんなことをされても私はうれしくないけれど、あの人がだった



ら喜ぶだろう”というような要素も入りうる。このことが視点移入によるこの行為の生起に与える影響力の欠如をもたらしたのかもしれない。

一方、“自己制御”においては独自性欲求が抑制因となり、独自性欲求が強い人は弱い人に比べて自らを抑制するような行為をとらないことが明らかとなった。このことから、自己制御に関するPT行為に及ぼす独自性欲求の影響は示されたが、その影響力の方向性は仮説1とは正反対の方向性を示しており、その点で仮説1は部分的に支持されなかったといえよう。この結果についての考察は、独自性理論の再考の項で述べることにする。

また、本研究では想定していなかった要因間の間接的な効果も明らかとなった。

“関与・理解”においては独自性欲求と視点共存の要因が絡み合い、独自性欲求が強い場合にのみ、視点共存が促進因となり、視点共存しやすい人はそうでない人に比べて“関与・理解”をすることが明らかとなった。このことから、PT行為の生起における個人差特性の影響を考える時、それらの間接的な効果についても考慮せねばならないことが明らかとなった。そしてそれは主に、相手と関わり、相手を理解しようと試みる行為に見られるような、視点を取る相手への強い意識が必要な行為において極めて必要であると考えられよう。

### 独自性理論の再考

既に述べてきたように、人が、対人場面において、他者の中で自分の居場所を作るため（他者からの受容）あるいは不快感を抱かないようにするため（自己による受容）には、自他の差異性がちょうどよい程度（中程度）に調整すべく、差異性の表出を控えたり、他者に同調したり、関わる他者を選定したりして、差異に対する自己コントロールを行う必要がある。本研究では、PT行為のありようを明らかにしたり仮説の検証を行ったりするのみならず、最後に、このような自己制御の研究として独自性理論を再考してみたい。

近年、社会心理学の領域においてはBaumeister, Bratslavsky, Muraven, & Tice (1998), Muraven,

Tice, & Baumeister (1998) といった研究をきっかけに、自己制御への関心が高まっている (e.g., Fischer, Greitemeyer, & Frey, 2008 ; Vohs, Baumeister, Schmeichel, Twenge, Nelson, & Tice, 2008)。このことは、対人場面の様々なところで、人がいかに、自己制御、すなわち“自分の状態や行動を自らモニターし、自己の持つ何らかの規準と照合させて評価し、行動を選択・変化させるなどして自らを制御・統制している（宮崎・中江・古賀・押見, 2007）”かを示すものであるといえる。独自性の問題についてもそれは例外ではなく、独自性理論を自己制御に関する一理論と捉えることができる。“自他間に中程度の差異を持つ私”という規準にそって、人は、今の自分がその規準にどれだけあてはまっているかを照合し、あっている場合はそれを維持すべく、あっていない場合は適合すべく、差異を調整することで行動を制御・統制するのである。こうした考え方に基づくと、独自性理論における“独自性欲求の高さ”についても見直す必要があるのではなかろうか。独自性欲求が高いということは、これまで暗黙のうちに考えられてきた、飢餓や所属、自尊などの他の欲求と同じく、欠如から充足を求めていくという、ただ単にひとつの欠乏欲求としての“人と違っていたい”という気持ちの強さを表しているのではなく、規準照合や行動統制および他者への意識の高さを含む、“中程度に人と違っていたい”という、予め“充足レベルの指標”が付与された気持ちの強さを表していると考えることができる。この“中程度”という充足レベルの指標を持ち続けるためには、他者との比較を繰り返すことによって中程度である自分の位置を保持しなければならないため、必然的に、他者（の視点・視線）を意識することになる。だからこそ、自己差異性の知覚においてPTが重要な要素となるのである。そしてそうであるならば、“独自性欲求の低さ”とは、“人と違っていたくない”ではなく、“中程度でさえ人と違っていたくない”、つまり“人と同じがよい”なのではないか。人と同じであるためには、他者を意識しなくてはならない。他者に注

意を向けなければ、あわせることはできないからである。ゆえに、独自性欲求が強くて弱くても、その理由は異なれども、他者を意識するのである。この理由の違いが、他者への意識のありようをも変えるかもしれない。独自性欲求が高い場合、他者は、中程度という指標を維持するための、ただ観察し自己と比較する差異の源泉（出発地点）でしかないが、独自性欲求が低い場合、他者は、自己と“同じになる”ための目標（到着地点）となり得るであろう。そして、そのいずれにおいても、自他の差異性は他者との関わり合いの中で“調整”されるのである。このことから考えると、本研究において仮説1が一部支持されなかった理由、つまり自己制御というPT行為において独自性欲求は促進因ではなく抑制因になった理由は、他者を意識し、自分と“目標である他者”との一致を試みる独自性欲求低群のほうが、同じく他者を意識するが、そのことにより差異を中程度に調整し続けようとする独自性欲求高群よりも、自己を制御するようなPT行為を強いられやすいということを示唆しているのかもしれない。

これらの考えは、現段階では推論の域を出ない。しかしながら、PT行為において独自性欲求の強さというものが様々な形で影響を及ぼしたのは、こうしたことが関係しているかもしれない。今後は、更なる検証を進めることにより、このような考えの妥当性を示していく必要がある。

## 謝辞

本論文を作成するにあたり、貴重なご助言を頂きました立教大学 押見輝男教授、芳賀 繁教授に深謝いたします。また、調査にご協力くださいました学生の皆様に心から感謝いたします。

## 引用文献

- Baumeister, R.F., & Leary, M.R. (1995). The need to belong: Desire for interpersonal attachments as a fundamental human motivation. *Psychological Bulletin*, **117**, 497-529.
- Baumeister, R. F., Bratslavsky, E., Muraven, M., &

- Tice, D. M. (1998). Ego depletion: Is the active self a limited resource? *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 1252-1265.
- Davis, M. H. (1983). Measuring individual differences in empathy: Evidence for a multidimensional approach. *Journal of Personality and Social Psychology*, **44**, 113-126.
- Davis, M. H., Conklin, L., Smith, S., & Luce, C. (1996). Effect of perspective taking on the cognitive representation of persons: A merging of self and other. *Journal of Personality and Social Psychology*, **70**, 713-726.
- Fischer, P., Greitemeyer, T., & Frey, D. (2008). Self-regulation and selective exposure: The impact of depleted self-regulation resources on confirmatory information processing. *Journal of Personality and Social Psychology*, **94**, 382-395.
- 平田万理子 (1998). 対人状況における自他の特異性知覚 立教大学大学院文学研究科修士論文 (未公刊).
- (Hirata, M.)
- 平田万理子 (2002). パースペクティブ・テイキングが自己差異性の知覚に及ぼす影響 日本社会心理学会第43回大会発表論文集, 388-389.
- (Hirata, M.)
- 平田万理子 (2007). パースペクティブ・テイキングに関する質的研究 (1) ——他者の視点に立つ状況とは?—— 日本心理学会第71回大会発表論文集, 69.
- (Hirata, M.)
- 平田万理子 (2008). パースペクティブ・テイキングにおける自他の融合性について 日本社会心理学会第49回大会発表論文集, 216-217.
- (Hirata, M.)
- 中江須美子・古賀ひろみ・平田万理子・山口一美・坂井 剛・押見輝男 (2000). パースペクティブ・テイキングと自己——Davisのパースペクティブ・テイキング尺度における検討——立教大学心理学研究, **42**, 57-67.
- (Nakae, S., Koga, H., Hirata, M., Yamaguchi, K.,

- Sakai, G., & Oshimi, T. (1999). Perspective-taking and self: The relationships between self variables and the Davis (1983) perspective-taking scale. *Rikkyo Psychological Researchs*, **42**, 57-67.)
- 中村陽吉 (編著) (2000). 対面場面における心理的個人差——測定の対象についての分類を中心にして——ブレーン出版.  
(Nakamura, H.)
- Maslow, A.H. (1954). *Motivation and Personality*. Harper & Row.
- 宮崎貴子・中江須美子・古賀ひろみ・押見輝男 (2007). 特性自己コントロール及び状態自己消耗の測定 立教大学心理学研究, **49**, 33-45.  
(Miyazaki, T., Nakae, S., Koga, H., & Oshimi, T. (2007). Measuring trait self-control and state self-depletion. *Rikkyo Psychological Research*, **49**, 33-45.)
- Muraven, M., Tice, D. M., & Baumeister, R. F. (1998) Self-control as limited resource: regulatory depletion patterns. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 774-789.
- 岡本浩一 (1985). 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究 心理学研究, **56**, 160-166.  
(Okamoto, K. (1985). A study on measuring the individual difference in need for uniqueness. *The Japanese Journal of Psychology*, **56**, 160-166.)
- Snyder, C. R., & Fromkin, H. L. (1980). *Uniqueness: The human pursuit of difference*. New York: Plenum Press.
- Vohs, K. D., Baumeister, R. F., Schmeichel, B. J., Twenge, M. T., Nelson, N. M., & Tice, D. M. (2008). Making choices impairs subsequent self-control: A limited-resource account of decision making, self-regulation, and active initiative. *Journal of Personality and Social Psychology*, **94**, 883-898.

——2008. 9. 29 受稿, 2008. 12. 19 受理——